第168号(2000年5月)

調査と情報

編集・発行
㈱農林中金総合研究所基礎研究部
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-8-3
TEL. 03-3243-7331
FAX. 03-3246-1984
E-mail：kaneko@nochuri.co.jp

「協同活動強化第八次三ヶ年運動」に取り組む農協から学ぶ

今年三月、集落営農についての話を伺うため、富山県砺波平野の南西部にある農協を訪問した。

同農協では、一九七〇年代半ば以降、積極的に集落営農組織を育成してきており、十数ヵ所にわたる実態調査の中で、これほど農協が熱意を込めて取り組んでいるところは、他に例をみないほどであった。そして、最初に受けた説明が同農協の「協同活動強化第八次三ヵ年運動（一九九八～二〇〇〇年）・明日をめざして」であった。

周知のとおり「協同活動強化運動」は、七六年の第一四回、七九年の第一五回全国農協大会において決議され、全国的に展開された農協運動である。この一次、二次の二回にわたる「協同活動強化運動」が取り組まれた背景には、高度経済成長のもとで、農協事業は順調な業容の拡大をみたものの、それまでの組合員と農協の結びつきの弱まりや協同活動の軽視傾向の反省があり、協同組合の本質に立ち返るべく「協同活動」の強化が提起されたのである。

当時の「協同活動強化運動」に若干触れると、その最大の特徴はその運動展開を決定するに至る過程そのものが大切にされ、組合員自らがそれに参加し、実践することを重視したところにあった。すなわち、運動そのものが組合員自らの協同活動をベースに組み立てられていたといってよい。

例えば、この運動の大きな柱の一つが「地域農業振興計画」の樹立・実践であったが、その計画づくりは、個々の農家の営農計画を基礎に、集落の営農計画を積み上げ、それに農協の独自の役割を加味して、農協が策定するというものであった。

同農協では、二五年にわたる協同活動強化運動のなかで、徹底した集落座談会での話し合いと、組合員、役職員が一体となった集落営農づくりを進めてきた。そして現在、地域全体を一つの農場に見立て、転作対応も含めた農地の集団的利用を可能にさせる、「一町一農場」づくりに取り組んでいる。

こうした取り組みから学ぶ点は、協同組合の本質とは何かということである。そもそも協同組合の目的は、組合員が自らのニーズに従って協同活動や事業に参加し、それらを通じて経済的・社会的・文化的ニーズを実現していくことにある。農協の事業は、そうした協同活動や事業利用に支えられて始めて成立する。同農協の活動は、この原点に忠実に則り、まさに「継続は力なり」とする取り組みを今日まで続けてきているといえる。

さて、今年十月には、第二二回全国農協大会が予定されている。そこでは参加型組織である農協の特性を活かし、組合員組織の活性化を通じた協同活動への参画の促進という方針も盛り込まれている。今日、二五年前とは大きく環境は変化したものの、同農協の取り組みは、二五年前に提起された「協同活動強化運動」の真の意味を、改めて問い直させずにはおかないように思われてならない。（副部長　木原　久）

今月のテーマ：山村社会と林業

「協同活動強化第8次3ヶ年運動」に取り組む農協から学ぶ…1
世紀末における山村問題の位相……2
林家が主体となった組織化の意義を考える…3～4
地球温暖化問題と森林……5～6
多角的事業展開で発展……7～8
ぶっくレビュー『持続型農業からの日本農業再編』『エコ農業－食と農の再生戦略－』…9
あぜみち……10
虹のかけ橋……11
統計の眼　「地域社会と子ども－「いじめ」について」…12
編集後記……12